京都大学	博士（　文学　）	氏名	赤瀬　知子
論文題目	院政期以後の歌学書と歌枕 享受史的視点から		

（論文内容の要旨）

本論文は、院政期から江戸時代初期にかけての歌学書、注釈書、名所歌集などについて、享受史的視点からひとつの考察を試みようとしたものである。たとえば和歌史や諸本論を、あるいは中世の人びとの校勘という行為を、享受という視点から読み解くことで、文学作品は、思いもかけない一面を披瀝しはじめる。文学史をより鮮明なものとするためにも、享受史的視点は有効であると思うのである。取りあげた作品は、源俊頼『俊頼髄脳』、勝命『真名序注』、『内裏名所百首』、宗祇『浅茅』、戸田茂睡『梨本集』、『類字名所和歌集抜書』などである。本論文の構成は、以下の通りである。

序論

一　歌学編

○『俊頼髄脳』享受史試論ー俊頼から顕昭・定家へー

○享受と諸本ー『俊頼髄脳』諸本考ー

○久世本『俊頼髄脳』成立考

○古今集ー享受史ー院政期から鎌倉期ー

○院政期の古今集序注と日本書紀注釈書ー勝命『真名序注』を中心にー

○制詞の享受史・覚え書き

二　名所・歌枕編

○疎竹文庫旧蔵『名所三百首注』考

○伊達文庫蔵『名所三百首注』研究

○曼殊院蔵『内裏名所百首』の性格

○『内裏名所百首』の享受と歌枕の固定化

○宗祇の読書ー岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』をめぐってー

○『類字名所和歌集抜書』諸本論

○抜書の意味ー『類字名所和歌集抜書』の場合ー

三　歌枕資料編

○疎竹文庫旧蔵『名所三百首注』翻刻

○伊達文庫蔵『名所三百首注』翻刻

○『宗砌名所和歌』・『宗祇名所和歌』

結論

序論

印刷文化が普及して、テキストがほぼ標準化した現代とは違って、読み手がどのようなテキストに基づいたかは、かつて大きな問題であった。基づいたテキストによって、作品の受け取り方にかなりの差異が生じたからである。当時の人々が、どのようなテキストを用いたかということを中心に据えて、歌学書や名所歌集などの享受の問題を考えてみたい。

一　歌学編

『俊頼髄脳』の諸本５７点の本文の異同について、享受史的視点から解釈を試みた。また、顕昭本『俊頼髄脳』の重要性を指摘するとともに、その書写年代も推測した。古今集注釈書についても同様の視点により網羅的に概説、また勝命『真名序注』については、書物に対する享受の仕方の、時代によるずれを考えてみた。茂睡の批判した制詞については、その出自を明らかにしようとした。

○『俊頼髄脳』享受史試論ー俊頼から顕昭・定家へー

『俊頼髄脳』の顕昭本と定家本との本文の異同から、顕昭が俊頼説を忠実に継承し

ようとしたのに対して、定家は自説を用いて俊頼説を改変しようとしたとみられた。俊頼から顕昭へと継承された新しい表現を求める動きは、定家によって斥けられたのだ。つまり、和歌史の流れが、定家によって大きく変えられたのである。これは、俊頼から定家へという和歌史を『俊頼髄脳』の享受を軸として考察してみようとする試みでもあるとともに、従来軽視されてきた顕昭本『俊頼髄脳』の重要性を指摘するものでもあった。

〇享受と諸本ー『俊頼髄脳』諸本考ー

管見のおよんだ『俊頼髄脳』の諸本５７点を分類しなおした。顕昭は顕昭本に近い『俊頼髄脳』と、『唯独自見抄』に近い『俊頼髄脳』との、少なくとも２種類の『俊頼髄脳』を用いたと推定された。顕昭の抱いた俊頼像には、幾らかの巾の広さがあったようだ。また、真観が用いたのは『俊頼口伝』という伝本で、その内容は彼の歌道上の立場に照応している。享受史の一形態として、諸本論や系統論を想定してみる必要があるだろう。

〇久世本『俊頼髄脳』成立考

京都大学附属図書館所蔵の顕昭本『俊頼髄脳』（久世本）の成立年代についての考察。同図書館には、久世家旧蔵書が他にも所蔵されている。それらとの比較から、久世本の奥書筆者が久世通熙（みちさと）であり、書写年代は江戸後期であることが推測された。久世本が顕昭本で最古に属する写本という従来の見方は、変更の必要がある。

〇古今集ー享受史ー院政期から鎌倉期ー

院政期から鎌倉期にかけての古今集の享受史と、和歌の家の展開を概論的に述べた。

院政期の古今集注釈書などに及ぼした日本書紀注釈の影響の大きさや、六条家歌学の御子左家歌学に及ぼした影響、鎌倉後期の反御子左派など異端の活動についても指摘した。

〇院政期の古今集序注と日本書紀注釈書ー勝命『真名序注』を中心にー

現存最古の古今集注釈書とされる勝命『真名序注』や江家本『仮名序注』に、『日本紀竟宴和歌』・信西『日本紀抄』・『日本紀私記』などの影響が大きいことを述べた。古今集注釈書と日本書紀注釈書との関係は、すでに院政期から密接であったのである。また、院政期における「日本紀」「古語拾遺」という概念が、現在のそれとは異なる広義のものであったことも指摘した。

〇制詞の享受史・覚え書き

室町末期の制詞が『詠歌一体』を中心として理解されていたのに対して、江戸初期から制詞が集成され、制詞の範囲が拡大される傾向にあったことを指摘した。戸田茂睡『梨本集』によって排撃されたのは、室町末期の制詞ではなく、江戸時代に入って拡大された制詞の世界であることを指摘し、制詞の享受にも史的変遷が見られることを述べた。

二　名所・歌枕編

『内裏名所百首』の伝本は管見でも５３点を数えるが、特筆すべきはそのうちの３２点が抄出本やその注釈書であることだ。抄出本は初心者に喜ばれ、室町時代を中心に多く著された。抄出本２点を紹介し、また、当時の歌枕の変化と、『内裏名所百首』の享受との関係についても考えてみた。一方、歌数１２００首の曼殊院蔵本については、慈運の校勘を、彼の読書行為と考えた。『浅茅』についても、宗祇の読書を推測してみた。『類字名所和歌集抜書』については、親本の昌琢『類字名所和歌集』と比較した。

〇疎竹文庫旧蔵『名所三百首注』考

『内裏名所百首』の歌数１２００首の伝本や３００首の抄出本、注釈書など、管見のおよんだ計５３点を分類した。疎竹文庫旧蔵本は歌数３００首の注釈書。作者につ

いては、連歌に近しい公家以外の身分の人物と推測される。また、注釈には抄物由来のことばが散見し、根拠を明示しない中世風な解釈も見える。流布本などとの影響関係もうかがえるが、その相互関係はなかなかに難しいようである。
○伊達文庫蔵『名所三百首注』研究
　これも『内裏名所百首』の歌数３００首の注釈書。作者は未詳ながら、中世語が多く用いられ、説話を多用し、本歌を多く掲げ、漢詩・漢文を少なからず引用する、などの特色があり、必ずしも啓蒙的な注釈書とばかりも言い切れない。ただし、歌の意味や情緒を分かりやすく解説するという一面もあるようだ。
○曼殊院蔵『内裏名所百首』の性格
　歌数１２００首の『内裏名所百首』の諸本２２点を調査、分類した。曼殊院蔵本は、慈運が永正元（１５０４）年に書写したもので、現存する伝本のうち最古のものに属する。注目されるのは、慈運の校勘の跡が数多くみられることである。なかでも見せ消ちは単なる誤写の訂正ばかりではなく、本文選択の跡かと思われる。つまり、これらの校勘は、慈運の読書行為であったと考えられ、室町末期の読書・享受の実態を示す好例であるといえよう。
○『内裏名所百首』の享受と歌枕の固定化
　南北朝時代から江戸時代初期にかけて、歌や連歌に用いられる名所の数が総体的に減少するなかで、『内裏名所百首』に一致する名所の数はあまり減少することがなく、割合としてはむしろ上昇する傾向にあったことを指摘した。『内裏名所百首』の抄出本は、初心者やその周辺の人びとに、歌枕の教科書として迎えられたようだが、そうした簡便なテキストとその享受者層とが、歌枕の固定化へと向かう時代の流れを支えていたと考えられる。
○宗祇の読書ー岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』をめぐってー
　宗祇の『浅茅』について、その後半部が西尾市岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』によく似た名所歌集に基づいていることを証明した。書物に対する志向も時代とともに変化する。現代ではあまり顧みられない岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』だが、それに近似する書物が、宗祇に読まれていたのである。宗祇の作品のなかに現れる名所や彼の歌枕観について考える際、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』は不可欠の資料であるといってよい。
○『類字名所和歌集抜書』諸本論
　『類字名所和歌集抜書』は、里村昌琢『類字名所和歌集』を抄出したもので、伝本は２３点を数える。『類字名所和歌集』から、名所数が約２分の１に、歌数は約３分の１に削減されている。江戸時代初期の読者層の拡がりと、それにともなう享受者層のレヴェルの低下に応じて求められ、求めを受けて刊行されたものと考えられる。
○抜書の意味ー『類字名所和歌集抜書』の場合ー
　『類字名所和歌集抜書』と昌琢『類字名所和歌集』とについて、収められた歌枕のイメージや歌枕観を比較してみた。『類字名所和歌集抜書』は歌枕の数や歌数こそ少ないが、歌枕の中心的なイメージについては、『類字名所和歌集』のそれを忠実に継承しようとしたと思われ、『類字名所和歌集』のいわばダイジェスト版をめざしたと考えられた。そこに当時の「抜書」＝抄出本のひとつのありようがうかがえる。

三　歌枕資料編
　「二　名所・歌枕編」で解説を施した、２点の資料の翻刻を載せる。またその他に、２点の小さな名所歌集の翻刻も載せる。これら４点は、先に述べたことがらを傍証するものであり、同時に斯界の研究に資するものと考えられるからである。
○疎竹文庫旧蔵『名所三百首注』翻刻
　疎竹文庫旧蔵の『内裏名所百首』で、歌数３００首の注釈書の翻刻である。
○伊達文庫蔵『名所三百首注』翻刻

伊達文庫所蔵の『内裏名所百首』で、歌数３００首の注釈書の翻刻である。
○『宗砌名所和歌』・『宗祇名所和歌』
これらの２点は、一首の歌のなかに多くの名所を列挙して、歌枕を覚えやすくした名所歌集である。いずれも『内裏名所百首』の抄出本に付載されている。

結論
以上、歌学書や名所歌集を対象として、享受史的視点からの考察の可能性を模索した。『俊頼髄脳』では、本文の異同という書誌的問題にそうした視点を導入することで、和歌史がかなりリアルに読み解けた。また、享受史の一形態として、諸本論、系統論を想定する必要性も指摘した。その他の作品においては、抄出本、あるいは中世人の校勘という行為などの問題を考える際に、享受という視点がきわめて有効であることを示し得たように思う。書物を、諸本を、いかに著述されたか、ではなく、いかに享受されたか、という視点から捉えてみる必要があるということを、あらためて強調しておきたい。享受史的視点は、文学作品や文学史の研究にたいへん有用だと考えられるのであり、それは、今後、文学研究に積極的に援用されるべきではないかと思うのである。

（論文審査の結果の要旨）

たとえば『万葉集』でも『源氏物語』でも、その編者、著者の書き記した原本が残っているわけではない。はるか後の世の人々が書写した諸本が伝わるばかりである。それには誤写、誤脱などが多いのはもとより、筆写する者が作品に共感するあまりにそれを書き改めてしまうといった歪曲もありえた。親しまれた古典になればなるほど異本の数は多くなり、文字、文章の異同、改変は際立つ。国文学研究における主な関心が、今日残されるそれらの異本類を整理し、系統立てて、原本に遡ろうとすること、また後の解釈による誤り、改竄などを見逃さず、それらを削り捨てて書物本来の姿を復元すること、それらにあったのは当然のことであった。

その一方で、さまざまな異本群を作り、読み継いできた人々によって、古典は今日までその命を伝えられてきたとも言える。そのような異本の総体が古典であるとさえ言いうるであろう。それぞれの異本のひとつひとつには写し手の心が託されている。諸本研究の上で重要とされる写本も、そうでないとされる写本も、その一字一字の向こうにはその書を享受する人々がいた。人々の心があった。本論文はそのように考えて、さまざまな書物の異本群に立ち向かう。原本に遡るためではなく、それぞれの異文のもつ意味を問い、異本を作った人々の心を読み解こうとする。

本論文は三部に分かたれている。歌学編、名所・歌枕編、歌枕資料編である。そのうち、特に第一部歌学編に本論文の方法意識が明確に打ち出されている。その第一章「『俊頼髄脳』享受史試論一俊頼から顕昭・定家」は、顕昭と藤原定家という歌道観を異にする二人の歌人の書写本を各々の祖本とする『俊頼髄脳』諸本間の異文が、顕昭と定家の立場の相違を反映して発生したことを指摘する。たとえば『俊頼髄脳』において歌の理想を述べるもっとも重要な一節にすら異文がある。顕昭本に「けだかくをもしろき（面白き）をひとつのこととすべし」とある箇所が、定家本には「けだかくとほしろき（遠白き）をひとつのこととすべし」とある。「をもしろき」と「とほしろき」と、文字面は似ながら意味合いをまったく異にする言葉となっているのである。その異文に対して、論者は、それぞれの自作の歌、歌合の判詞、歌論などを精密に分析することによって、俊頼が伝統的な歌語よりも、むしろ珍しく新しい表現を目指していたこと、顕昭もそれを継承しようとしていたこと、そして、一方で、定家が三代集の伝統的な歌語を重んじたことを明らかにして、顕昭本の「をもしろき」が俊頼の意をおそらくは正しく伝えるものであり、定家本の「とほしろき」は、自らの歌道観の方に俊頼という偉大な先達を引き寄せようとしたことの結果と見る。異文の発生の意味を詳しく追求し、それによって平安時代末から鎌倉初期にかけての和歌史に新たな視野を切り開こうとする先鋭的な論考であった。

第二章「享受と諸本」は、五十部以上にもなる『俊頼髄脳』の伝本における異文を具体的に分析して、それらが定家の属する御子左家、顕昭が属する六条家という歌道家の対立、葛藤の関係とともにあったことを明らかにする。諸本が中世の和歌史を動かす動力にもなったことを示す有益な作業であった。

第二部の名所・歌枕編の諸論は、『新古今和歌集』編纂の直後、順徳院の命によって編まれた『内裏名所百首』の数多くの異本についての論考である。歌に詠まれる名所百箇所について十二名の作者の歌を集めるその歌集が、それ自体数多く書写され、また注を付けられ、さらに歌を抄出した縮約本となり、さまざまに姿を変えた。その異本群を考察する試みである。注釈には、儒教的な意味を付するものがあり、土地にかかわる説話を書き込むものもある。縮約本にも写本、版本などの伝本が数多い。それら異本の姿を丁寧に描き出すことにより、ひとつの書物が時と場と人に応じて変容していった意味を明らかにしようとする試みであった。「歌人は居ながらにして名所を知る」という諺があるように、和歌にとって名所、歌枕はもっ

とも重要な表現の素材である。歌枕の心はどのように学ばれたか、またそもそも歌枕とは何であったかを知るための重要な手がかりが、これらの研究によって得られることであろう。

もっとも、それらの異本は余りにも種類が多く、それぞれの伝本もおびただしい。本論文は、それら異本の異相を叙述することに精力のほとんどを費やしてしまっているという印象がある。「名所百首」の多くの異本群を発掘し、それを世に紹介し続けた論者積年の功を多としつつ、異本それぞれの意味の詳細な検討が今後の論者の課題として残されていることを指摘しておきたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十六年九月三十日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。